

特別活動部会 研究の構想（案）

平成30年度～

I 研究主題

学級活動を通して身に付けるべき資質・能力を育成するための指導はどうあればよいか。

II 主題設定の趣旨

特別活動は、「集団や社会の形成者としての見方や考え方を働かせながら「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する」ことを通して、資質・能力を育むことを目指す教育活動である。特別活動で育成を目指す資質・能力とは以下の三つである。

- (1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。
- (2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。
- (3) 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。

上記の資質・能力を育成するための視点として、学習指導要領では「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つが挙げられており、学習過程においても重要な意味をもつ。また、資質・能力を偏りなく育成するために、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うことが示されている。特別活動における主体的・対話的で深い学びの実現とは、学習過程において授業や指導の工夫改善を行うことで、一連の活動過程の中での質の高い学びを実現することである。それは、特別活動の各活動・学校行事の内容を深く理解し、それぞれを通して、資質・能力を身に付け、中学校卒業後も能動的に学び続けるようにすることである。

学級活動は、学校生活において最も基礎的な集団である学級を基盤とした活動である。日々の生活を共にする中で、生徒は、一人一人の意見や意思は多様であることを知り、時には葛藤や対立を経験する。こうした中で、自ら規律ある生活を送るために、様々な課題を見だし、課題の解決に向けて話し合い、合意形成を図って決まったことに対して協力して実践したり、意思決定したことを努力したりする。

そこで、これまでの研究の成果を踏まえ、学級活動における「問題の発見・確認」、「解決方法等の話し合い」、「解決方法の決定」、「決めたことの実践」、「振り返り」といった学習過程の中で資質・能力の育成を図りながら主題の解明に取り組んでいきたい。

III 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

- (1) 学級における集団活動や自律的な生活を送ることの意義を理解し、話し合いの進め方やよりよい合意形成と意思決定の仕方、チームワークの重要性や役割分担の意義等について理解するようにする。
- (2) 学級や自己の生活、人間関係をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。
- (3) 学級における集団活動を通して身に付けたことを生かして、人間関係をよりよく形成し、他者と協働して集団や自己の課題を解決するとともに、将来の生き方を描き、その実現に向けて、日常生活の向上を図ろうとする態度を養う。

2 研究内容

- (1) 指導計画を工夫する。
 - ・小学校の6年間を踏まえ、3年間の学校生活を見通した系統的、発展的な指導計画の充実
 - ・生徒が本質的な課題を見だして解決に向けて話し合う活動の充実
 - ・カリキュラム・マネジメントの観点に立った、各教科等の指導との関連
 - ・キャリア教育の観点に立った指導の充実
- (2) 指導内容や指導方法を工夫する。
 - ・生徒の実態に応じた課題設定や学習形態、思考ツール等の工夫
 - ・話し合いの進め方やよりよい合意形成と意思決定の仕方の指導
 - ・話し合いで決めたことの実践に向けた指導の推進
 - ・ガイダンスとカウンセリングを充実させた指導の推進
 - ・家庭・地域との連携や社会教育施設等の活用
- (3) 評価を工夫する。
 - ・生徒の自己有用感や自己肯定感を高め、よさや可能性を伸ばす観点に立った、継続的、多面的、総合的な評価
 - ・PDCAサイクルを意識した、活動の振り返りと改善の工夫

特別活動部会 平成31年度研究計画（案）

I 研究主題

学級活動を通して身に付けるべき資質・能力を育成するための指導はどうあればよいか。
－生徒が主体的に参加し、合意形成や意思決定を目指す話し合い活動を通して－

II 主題について

1 昨年度の実践から

昨年度は、学級活動において、生徒が主体的に参加し、合意形成を目指す話し合い活動を通して、身に付けるべき資質・能力を育成するための指導はどうあればよいか、研究を進めてきた。その結果、次のような成果や課題が得られた。

- ・生徒自身が問題提起することで、課題に対する切実感をもち、主体的に話し合いに臨むことができた。
- ・一つの課題に対して、段階的に話し合い活動を設定することで、生徒は考えを深め、主体的に話し合いに参加することができた。
- ・合意形成を図る手段として、ボルダールールや意見を表明するシール・カードを活用するなど、多数決で排除されがちな少数意見を拾い、クラス全員の意見をくみ取る工夫が見られた。
- ・研究主題の副題が「合意形成を目指す話し合い活動」となっていたため、一人一人が課題の解決に向けて意思決定する内容の学級活動が行いにくくなっていた。
- ・合意形成に至る過程において、段階に応じた話し合いの方向性を全体で共通理解することができなかった。司会等への事前指導をさらに充実させる必要がある。

2 今年度の主題について

学級活動は共に生活や学習に取り組む同学年の生徒で構成される集団である「学級」において行われる活動である。生徒は、学級において生活上の問題を見付け、話し合い、合意形成したことに協働して実践したり、個々が直面する諸課題と向き合って自己を深く見つめ、意思決定して実践したりする。自主的、実践的な活動を通して、生徒は現在及び将来の自己と集団との関わりを理解し健全な生活や社会作りの実践力を高めていく。合意形成を図る活動では、生徒が見いだした課題について、一人一人の思いや願いを意見として出し合い、互いの意見の違いや多様な考えを大切にすることを意識させる必要がある。また、意思決定を目指す活動では、相手の意見を聞いて、自分の考えを広げたり、課題について多面的・多角的に考えたりして、自分に合った解決方法を自分で決めるように指導することが求められる。ここで述べた「合意形成」と「意思決定」を目指す活動は、いずれも学級活動における話し合いの場面を中核としている。そこで、授業のねらいや目指す生徒の姿を踏まえながら、話し合いを通して生徒が自らの意思で課題を解決し、実践していくための教師の指導や関わりはどうあればよいかについて研究を行う。

3 主題解明に当たって

主題解明に向けて、以下の4点を重点的に取り上げる。

- ・資質・能力を育むための「問題の発見・確認」、「解決方法等の話し合い」、「解決方法の決定」、「決めたことの実践」、「振り返り」という一連の学習過程の工夫
- ・アンケート結果やデータ等の実態に基づく切実感のある課題設定や議題選定の工夫
- ・主体的な話し合い活動を進めるための司会や記録といった計画委員会への事前指導や、効果的な合意形成や意思決定の場の設定
- ・小学校との接続を含め、中学校3年間を見通した系統的、発展的な指導内容の工夫

III 研究内容とその視点

1 指導計画の工夫

- (1) 学校の創意工夫を生かすとともに、学校の実態や生徒の発達段階等を考慮し、生徒による自主的、実践的な活動が助長されるようにする。
- (2) 内容相互、各教科、道徳科及び総合的な学習の時間等の指導との関連を図る。
- (3) 小学校からの接続に配慮し、中学校入学当初を含め3年間の学校生活を見通した系統的、発展的なガイダンスを指導計画に位置付ける。
- (4) 学級活動が、生徒の学校生活における学習や生活の基盤である学級を単位として展開されることから、年間指導計画の作成に当たっては、学級経営、学年経営との関連を図る。

2 指導内容と指導方法の工夫

- (1) よりよい生活や人間関係を築き、自治的能力を育成するための話し合い活動の充実
 - ・教師と生徒、及び生徒同士の相互理解を深め、相手の立場を尊重しつつ、共に学校生活の改善に向けた問題解決に取り組もうとする雰囲気をつくる。
 - ・生徒が自ら生活上の問題を見付けることができるように、班長会議や係会議、諸調査等を活用して学校生活を振り返る機会を設ける。
 - ・主体的な話し合い活動にするために、司会や記録といった計画委員会への事前指導の時間を確保し、学校生活と直結した、生徒にとって切実感のある議題等を設定したり、折り合いを付けて学級や学年・学校全体としての意見をまとめる話し合い活動を行ったりする。
 - ・小学校6年間の経験で身に付けてきた話し合いのスキルやルール、国語科等で学習した様々な話し合いの方法等を、授業に生かすように配慮する。
 - ・よりよい生活を築くために、集団としての意見をまとめたり、自己の問題に向き合ったりして意思決定するための話し合い活動を適切に設定する。
 - ・合意形成や意思決定したことを実践して振り返る機会を保障し、集団や自己の高まりを実感できる場や自己肯定感が高まる場を意図的に設定する。
- (2) 学校生活への適応や人間関係形成のための指導の充実
 - ・集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンスと、個々の生徒の多様な実態を踏まえ、一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリングの双方の趣旨を踏まえて指導を行う。
 - ・生徒が学校や学級での生活に見通しをもって積極的に取り組めるよう、計画的、組織的に適切な情報を提供する。
 - ・中学校入学当初においては、小学校と連携して生徒の実態を把握した上で、個々の生徒が学校生活に適応できるように配慮し、生徒が希望や目標をもって生活できるよう工夫する。
- (3) キャリア教育の視点に立った指導の充実
 - ・生涯を通じて主体的に進路を選択できる力を養うために、中学校入学から卒業までの3年間を見通した指導計画を作成し、継続した学習を進める。
 - ・学ぶことや働くことの意義について、自分なりの考えをまとめ、意思決定したり、実践後の振り返りを大切にしたりする活動を設定する。
 - ・保護者や卒業生等自分の身の回りの人、地域の職業人、生涯学習に取り組む人等、様々な立場の人から生き方や人生のありさまについて学習する場を設定し、自分の将来の生き方や生活について夢や希望をもつことができるようにする。

3 評価の工夫

- (1) 全教員の共通理解のもとで評価の観点を定め、生徒のよさや可能性を伸ばし自己有用感や自己肯定感を高めるために、育てたい生徒の姿を明らかにして具体的に評価する。
- (2) 生徒一人一人が、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして自己評価や相互評価ができるように、ポートフォリオ的な教材等を活用する。
- (3) 活動の過程における生徒の努力や意欲を積極的に認めたり、生徒のよさを継続的、多面的、総合的に評価したりするために、異学年や異校種、家庭や地域等からも評価できるよう工夫する。
- (4) よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育むために、個や集団の変容について、観点及び方法を重点化して評価する。

IV 研究方法

- 1 生徒や学校、地域の実態に合わせた題材を設定し、研究主題に沿った授業実践と研究授業を行う。
- 2 各郡市、地区で持ち寄った実践事例に基づいて共同研究を進め、研究主題の解明を図る。
- 3 各郡市、地区の研究成果を集約し、次年度以降の研究に生かす。

